北海道開拓の村　令和７年度テーマ展

「屯田兵設置百五十年」

1875(明治 8)年、現在の札幌市琴似に最初の屯田兵が入植してから 150 周年を迎えました。屯田兵制度は「明治維新・廃藩置県により職と禄を失った士族の救済」・「北辺の防備と治安維持」・「原野・山林の開拓」を目的に明治政府が導入したものです。「屯田兵」や「とんでん」の名称は、今なお北海道各地で使用され、北海道開拓に与えた影響の大きさを感じずにはいられません。

今年度のテーマ展は、北海道開拓の村に移築復元・再現された展示建造物と「屯田兵」とのつながりを紹介する内容となります。普段とは異なる視点で、開拓の村の魅力の一端をお楽しみください。

期　間　令和７年７月１９日（土）～８月２４日（日）

場　所　旧開拓使札幌本庁舎（ビジターセンター）二階ホール
※村内各所の屯田兵関連展示棟

主　催　一般財団法人北海道歴史文化財団（北海道開拓の村指定管理者）

協　力　北海道博物館　北海道立文書館　江別市郷土資料館　北海道屯田倶楽部

関連事業

（１）テーマ展関連講演会

「　屯田兵屋の謎を追って　」

講　師：　梶田　博昭 氏（北海道屯田倶楽部会長）

日　時：　７月２１日（月）　13:30～15:00

会　場：　ビジターセンター地下講堂　定員 150 名

（２）担当学芸員による展示ガイド

日　時：「屯田兵のくらし」　７月２７日（日）10：30～12：00

「屯田兵の周辺」　８月１６日(土)　10：30～12：00

内　容：テーマ展並びに開拓の村の屯田兵関連展示のガイドツアーを実施します。

※学芸員の深掘りツアーを兼ねて実施します。

（３）北海道屯田倶楽部による屯田兵ナビゲーター

日　時：令和７年７月１９日(土)，８月２日(土)，１１日(月)　10：00～14：00（途中休憩あり）

内　容：開拓の村の屯田兵関連施設と屯田兵の関わりを切り口に、屯田兵エピソードを紹介します。

会　場：旧開拓使札幌本庁舎、旧龍雲寺、旧来正旅館、旧札幌農学校寄宿舎

旧納内屯田兵屋、旧山田家養蚕板倉、旧岩間家農家住宅

展示資料目録

	資料名	年代	所蔵先
開拓使最初の屯田兵	屯田兵制帽(第一種)	明治期	北海道博物館
	屯田兵制帽(第一種)	明治期	北海道博物館
	屯田兵制帽(第一種)	明治期	北海道博物館
	屯田兵制帽(第二種)	明治期	北海道博物館
	『開拓使最初の屯田兵　琴似兵村』	1944(昭和19)年	個人蔵
開拓の村の屯田兵関連建造物	屯田兵制帽(第二種)（複製）	明治期	北海道博物館
	屯田兵制服（複製）	明治期	北海道博物館
北海道内37兵村	和田屯田兵村被服庫　ミニチュア模型	—	北海道博物館
	新琴似屯田兵中隊本部　ミニチュア模型	—	北海道博物館
	美唄屯田兵屋　ミニチュア模型	—	北海道博物館
	太田屯田兵屋　ミニチュア模型	—	北海道博物館
	野幌屯田兵第二中隊本部　ミニチュア模型	—	北海道博物館
	琴似屯田兵村兵屋跡　ミニチュア模型	—	北海道博物館
条例規則の変更にみる試行錯誤	水筒	明治期	北海道博物館
	屯田兵制服（ズボン）	明治期	北海道博物館

使用写真・画像

	資料名	年代	所蔵先
開拓使最初の屯田兵	軽川近傍西軍集合の図	1891(明治24)年	北海道大学附属図書館
	琴似村屯田兵村の開墾状況	1875(明治8)年頃	北海道大学附属図書館
	宅飼蚕種人名	1944(昭和19)年	北海道立図書館
開拓の村の屯田兵関連建造物	開拓使札幌本庁舎	明治期	国立公文書館
	龍雲寺本堂と大師堂	1907(明治40)年頃	篠路山龍雲寺
	上川郡永山村ノ景	明治末	北海道大学附属図書館
	旧納内屯田兵屋	2024(令和6)年	一般財団法人北海道歴史文化財団
	明治三十年度教育予定表	1897(明治30)年	北海道立図書館
	板倉のほぞ穴と蚕種製造所の蚕棚	2025(令和7)年	一般財団法人北海道歴史文化財団
	琴似神社	2025(令和7)年	一般財団法人北海道歴史文化財団
北海道内37兵村	道内各地の屯田兵関連展示施設写真	—	北海道屯田倶楽部
	琴似屯田兵村兵屋跡	2025(令和7)年	一般財団法人北海道歴史文化財団
条例規則の変更にみる試行錯誤	屯田兵条例、屯田兵移住給与規則、屯田兵給与令及明治二十七年勅令第九十五号	1904(明治37)年	国立公文書館

2025.7.19

屯田兵

開拓使になって明治三年から屯田兵設置が提案されたが、具体化したのは六年十一月の黒田清隆開拓次官の建議からである。翌七年六月、黒田は陸軍中将、屯田憲兵事務総理に任じ、十月屯田例則制定、八年一月青森、宮城、酒田及び道内の士族から募集を始めた。外国との紛議を恐れて警察権を持つ憲兵にしたが、後に改正された。

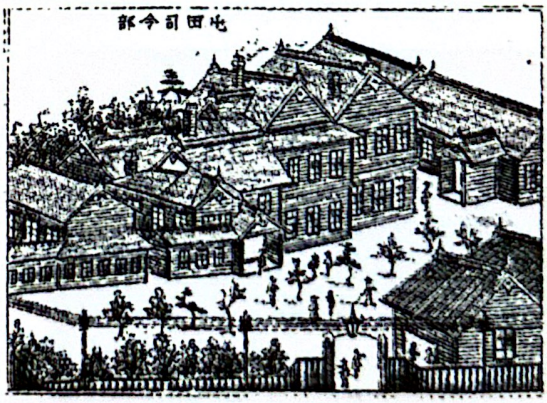
明治八年札幌本府防衛の構えで琴似兵村に入った屯田兵は百九十八戸、翌年には山鼻二百四十、琴似三、発寒三十二が配置された。屯田兵事務局は開拓使庁舎に設けられ、屯田兵は札幌市街見回り、山鼻火薬庫衛兵も任務であった。

屯田兵は農耕に従事する家族労働力を応募条件とするが、兵員も演習及び定休日以外は農作業に専念で、毎日夏は四時起床、七時から夜六時までの作業がラッパを合図に行われた。制定された軍服は上衣が短く、左ひじに北辰標識をつけ、霜降りズボンに赤の側線を入れた。

琴似、山鼻の屯田兵は西南戦争に出征した。殆どが東北士族なので、戊辰戦争の恨みとばかりに奮戦した。

札幌の屯田兵は、その後明治二十年新琴似、二十二年篠路兵村が開設されたが、いずれも氏族屯田である。屯田兵は当初世襲兵役であったが、二十三年の改正で琴似、山鼻とも予備役に編入、二十八年後備役になった。

日清戦争に際して屯田兵は、臨時第七師団を編成し東京まで出征した。戦後の明治二十九年五月常備第七師団が誕生、屯田兵で組織したが、徴兵令の道内施行に伴って同年十一月、月寒に野戦独立隊本部が置かれて現役部隊が編成された。三十三年、第七師団の大半は旭川に移転したが、歩兵二十五連隊だけは月寒に残ったのである。



屯田司令部の図(「札幌区実地明細絵図」(明26)から)

出典:「さっぽろ文庫第7巻 札幌歴史」札幌市教育委員会 北海道新聞社

北海道庁

開拓使、札幌県（函館県、根室県）を経て北海道を管轄する役所、北海道庁が設置されたのは、明治十九年一月二十六日の布告第一号による。

同時に長官、理事官以下の官制が定められ、岩村通俊が初代長官に任じられた。長官は内閣総理大臣直属で勅任一等、府県知事より上位である。この改革に先立って北海道を視察した金子堅太郎が官制を起草したものである。

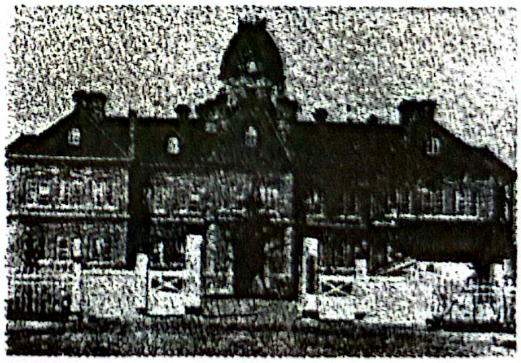
道庁の赤レンガは札幌風物詩の一つだか、もと赤レンガの北側にあった開拓使本庁舎（開拓の村に再現）が明治十二年の火災で焼けた後、南一条西三丁目の旧女学校跡に移り、ここが札幌県庁になり、道庁の庁舎になった。

復元した赤レンガには屋上にドームがあるが、これは最初の設計にはなかった。途中で岩村長官の命でドームを乗せたのだが、風が吹くと揺れて庁内仕事にならず、七、八年後に撤去された。

二代目長官永山武四郎は屯田兵本部長の兼任、かって上官堀基の北海道炭砿鉄道会社に幌内炭山と鉄道を安価に、また華族組合に一億五千万坪の農場を払下げた話は有名である。

明治二十三年七月、道庁長官は内務大臣管下に変わり、同年、府県自治制度ができたが、北海道は十年余り遅れ、北海道会の開設は三十四年である。しかも府県会と違って自治機能が弱く、反対に道庁長官の権限は著しく強かった。

その後、北垣国道長官の鉄道計画、また明治三十四年園田安賢長官の北海道十年計画以来、第一次及び第二次拓殖計画が進められるに至り、戦後の昭和二十二年五月、地方自治法施行によって道庁官制が廃止されるまで、北海道庁は三十二人の長官を数える。



明治22年完成したばかりの赤レンガ庁舎

出典：「さっぽろ文庫第7巻 札幌開始」 札幌市教育委員会 北海道新聞社

神　社

明治になって、いわゆる神仏分離のあと、神社は官・国幣社、県社、郷社、村社、無資格、の格付けが行われたが、この時点で見ると正式な神社の最初は札幌神社である。

札幌に最初の神社が創建されたのは安政年間であり、同四年に開拓が始まった発寒では発寒神社の前身である稲荷社が、また、五年から開拓が始まった篠路では篠路神社の前身である八幡社が、それぞれ創建された。しかし、これらの神社が公認されたのは明治も三十年代であった。

明治に入ってまずできた札幌神社は、明治二年九月、北海道開拓三神を神祇官で奉斎し、三年に仮殿を建立した。この頃は、勅祭社、あるいは一の宮と呼ばれていた。四年六月になって札幌神社として国幣小社に列せられ、現在の地に仮殿を建設して遷宮式を行った。五年一月には官幣小社、六年七月にはいわゆる、全道の鎮守社となり、二十六年には官幣中社、三十二年には同大社となった。

次に正式に神社となったのは三吉神社である。木村藤吉という人が秋田の三吉大神の分霊を持って渡道し、明治十一年私有地にまつったたことに始まる。十二年説教所となり、十三年に無格社、十五年に村社、二十九年に郷社となった。

十年代後半以降は続々と神社が建てられていくが、特に農村地区では、先ず、官の公認を得ずに移民が自主的に創建した、いわゆる無願神社として建ち、その中から公認神社が指定されるのが一般的で、無願神社が数倍あるという現象が続いたが、その中には、木の切り株に神棚を置き、差し掛け屋根を掛けた、俗に切株神社ともいうものもあった。お祭りにはこの前で飲んだり食べたり、相撲などをして一日楽しんだという。

明治十四年の札幌神社の景「最近之札幌」の明治の

出典：「さっぽろ文庫第7巻　札幌事始　札幌市教育委員会編　北海道新聞社

寺　院

仏教は、明治初年の廃仏毀釈により、藩によっては一宗派一寺に制限されたところさえある。道内では、明治三年に、増上寺が道内に寺院を設けたいと太政官に申し出たところ、手きびしく拒絶された上に、仏教そのものまで攻撃される有様であった。また、同年に、いわゆる本願寺道路を建設した東本願寺が、道内十六ヶ所に道場建設を出願したが、これも六ヶ所しか認められなかった。その中の一つ札幌管刹は、同年十月に創建された。この建物は、草葺きの仮堂であった。しかし、あくまでも官側のいう「宗法取締設置之道場」で、本願寺側は五年暮れに正式な寺院にと願い出たが、これを許されなかった。東本願寺派（大谷派）の別院となったのは、明治九年になってからである。

これと同じように、現在の中央寺（曹洞宗）も、明治七年に教導職制度による小教院設立の許可を得たが、ようやく中央寺として寺号公称の許可を得たのは明治十五年一月になってからである。

これに比べて、真宗本願寺派では、十一年に同宗仮出張所を設置、翌年にはもう別院となっている。この他、日蓮宗では十三年一月に経王寺（豊平村）、十四年一月に本龍寺（札幌村）、十五年三月に日登寺（琴似村）が寺院として創建されている。この内本龍寺が慶応四年四月に、札幌村の開祖大友亀太郎が建てた妙見堂が先駆とされ、八月の例祭には近村からも人が出て賑わいを見せたという。

明治十七年には教導職制度も廃止され、街の発展に伴って寺院、説教所が次々に建てられていき、仏教教団側もこれに積極的に助成を行った。

大谷派本願寺別院之真景
（札幌市地明細絵図より）明治20年代

出典：「さっぽろ文庫第7巻　札幌事始」　札幌事始　北海道新聞社

博覧会・共進会

明治時代、札幌ではしばしば博覧会、共進会が開催された。それは、開拓政策を進める上で重要な役割を果たしたからである。

開拓使は明治六年、物産局の中に博物課を置き、同年ウィーンで開かれた万国博覧会を始めとして、十一年のパリ万国博など海外の大規模な博覧会に道産品を出品するなど、道産品の紹介に努めている。

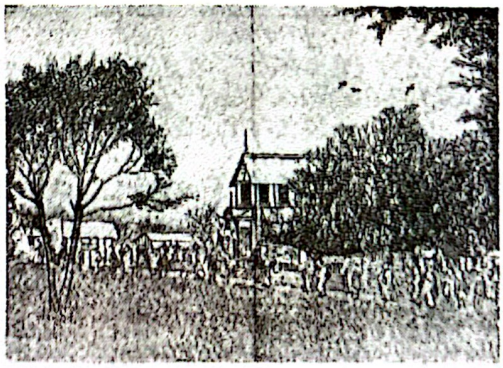
北海道最初の博覧会は明治十一年十月、札幌で開かれた第一回農業仮博覧会であった。この後、この博覧会は隔年、札幌と函館で交互に開かれることになった。

明治十四年には、開拓使と秋田、新潟、石川、福井四県の連合米沢(べいたく)共進会が大通の会場で行われた。

その後、明治十五年開拓使が廃止された後、札幌、函館、根室三県連合の第三回農業仮博覧会が札幌で開かれたが、翌年からは会の名称を北海道物産共進会と改め、函館、札幌、根室の順に開かれることとなった。

明治十九年に設置された北海道庁も拓殖政策を進める上で共進会を重視し、明治二十年、二十五年に札幌で開催し、会場も従来の中島遊園地（現中島公園）に移し、多額の費用を投じて常設の立派な陳列場を設けたが、その後は道庁主催の共進会は途絶え、民間団体が主催する畜産共進会や物産共進会に変わった。

大正七年、開道五十年記念の北海道博覧会が開催された。期間は八月一日から九月十九日までの五十日間で、第一会場が札幌中島公園、第二会場が北一条西四丁目、第三会場が小樽第二区営埋立地で延べ面積は約二十万五千平方メートル、出品点数は四万四千三百点を超え、入場者数は約百四十二万五千人に達した。



博物場で行われた第３回農業仮博覧会風景
〈「第三回札幌農業仮博覧会報告」(明15)から〉

出典：「さっぽろ文庫第7巻 札幌開始」 札幌市教育委員会 北海道新聞社

移住者の軌跡～北海道を拓いた先人たち

1869(明治２)年開拓使が設置され、北海道の開拓が本格的に開始されました。開拓事業は、アメリカをはじめとする欧米先進諸国の近代技術を導入して行われましたが、その担い手となったのは私たちの祖先である府県からの移住者たちでした。

先人たちは、厳しい自然環境に立ち向かい幾多の苦難を乗り越え、今私たちが暮らしている北海道の礎を築きました。そして、住宅様式や風習、郷土芸能といった郷里の文化を持ち込み、今に伝えています。

開拓の村では、移築・復元した建造物をとおして移住者の郷里を知ることができます。

◇旧岩間家農家住宅(農村群)

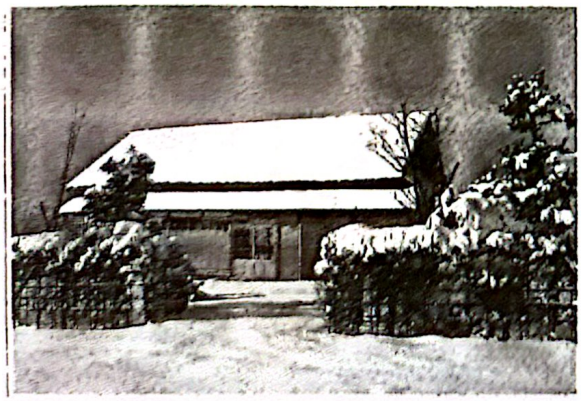
岩間家は、旧仙台藩亘理領の士族移民団の一員として 1871(明治４)年伊達に入植しました。

建物内部の井げた構造に仙台地方の特徴があります。

◇旧樋口家農家住宅(農村群)

樋口家の郷里は富山県上市町で、明治明治 26 年に札幌・厚別に入植しました。

建物内部の梁構造に、越中地方の建築様式である「ワクノウチ造り」を取り入れています。



移住者の出身府県 (単位：戸)

1882(明治 15)年～ 1935(昭和 10)年

1	青森県	68,855	25	栃木県	5,473
2	秋田県	64,067	26	静岡県	5,234
3	新潟県	61,636	27	奈良県	5,049
4	宮城県	51,831	28	大阪府	5,033
5	富山県	48,445	29	福岡県	5,017
6	石川県	47,901	30	山口県	4,951
7	岩手県	40,318	31	神奈川県	4,948
8	山形県	39,009	32	三重県	4,914
9	福島県	33,122	33	千葉県	4,670
10	福井県	27,392	34	山梨県	4,642
11	東京都	21,862	35	和歌山県	4,559
12	徳島県	17,970	36	群馬県	3,891
13	岐阜県	15,297	37	埼玉県	3,890
14	香川県	14,367	38	京都府	3,751
15	広島県	10,777	39	熊本県	3,481
16	愛知県	9,377	40	島根県	3,150
17	愛媛県	9,239	41	佐賀県	2,602
18	兵庫県	9,047	42	鹿児島県	2,505
19	鳥取県	7,665	43	大分県	2,472
20	茨城県	6,950	44	長崎県	1,500
21	滋賀県	6,533	45	宮崎県	624
22	長野県	5,956	46	沖縄県	67
23	高知県	5,810	47	その他	5,794
24	岡山県	5,563			

(帝国統計年鑑・北海道勧業年報・北海道庁統計書により作成)

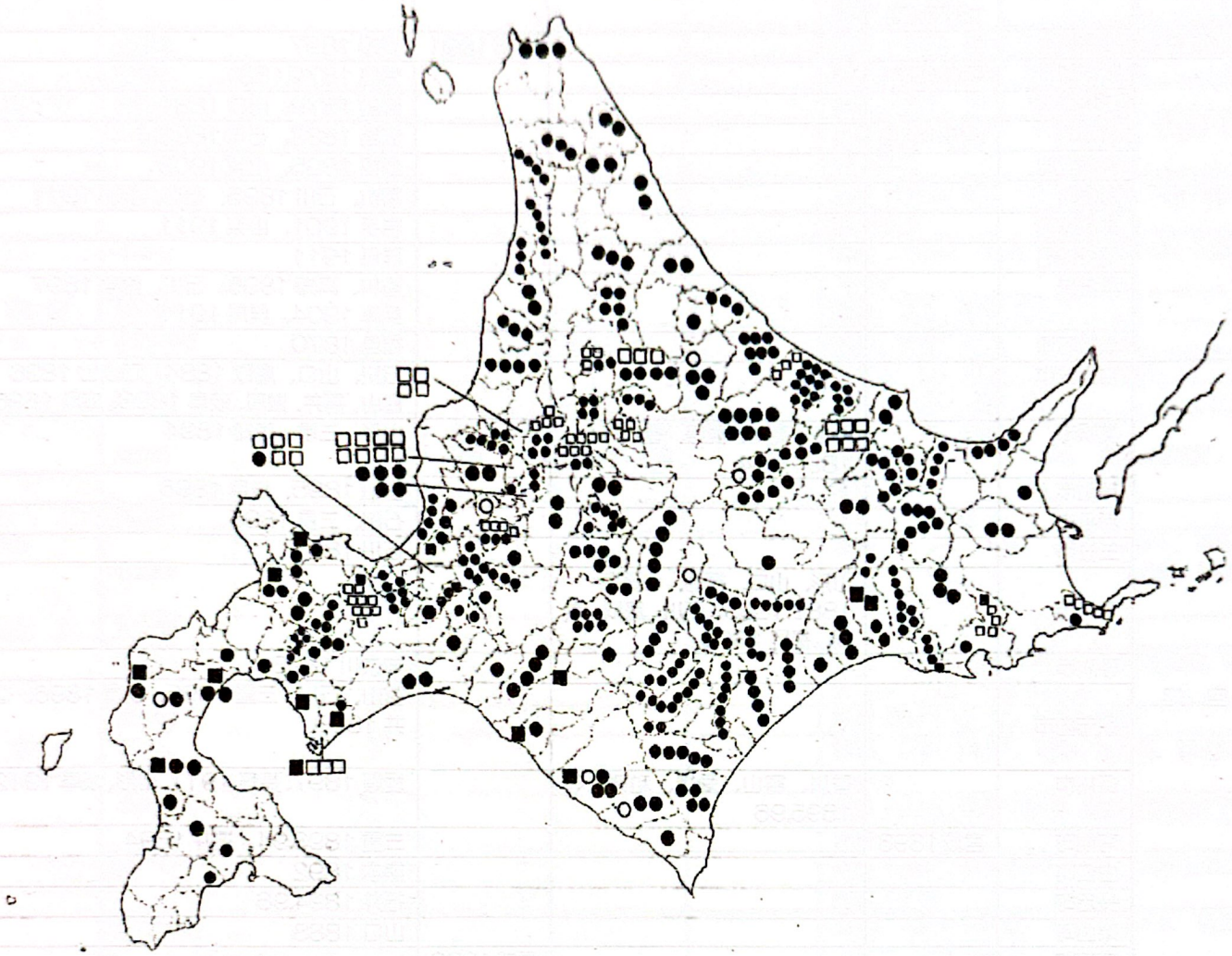
◇旧菊田家農家住宅(新潟県出身)では、野幌神社の祭りの日を再現し、三条神楽(新潟県)の系統である「野幌太々神楽」を紹介しています。

☆このほか、旧来正旅館(高知県出身)、旧近藤染舗(徳島県出身で藍染物業)、旧武岡商店(旧徳島藩家臣、淡路島出身)、旧三口河本そば屋(石川県出身)、旧武井商店酒造部(青森県出身)、旧青山家漁家住宅(山形県出身)、旧秋山家漁家住宅(秋田県出身)など、府県出身者の建造物を移築・復元しています。

北海道開拓の村
〒004-0006 札幌市厚別区厚別町小野幌50-1
TEL 011(898)2692　FAX 011(898)2694

故郷を離れて北海道へ～先人たちの移住先

団体移住者たちが入植した地域



図の表示：■士族団体の移住、□屯田兵の移住、○宗教団体の移住、●農民団体の移住

振興局	市町村	出身府県			
		士族	屯田兵	宗教団体	農民団体
石狩	札幌市	宮城1871	青森、岩手、宮城、福島等 1875,1876 佐賀、福岡、熊本、和歌山、山口等 1887~89		新潟 1870,71、山形 1870,75、徳島 1881、福岡 1881～1883、岡山 1882、広島 1884、山口 1884
	江別市		福島、山形、秋田、青森、岩手等 1878,1881,1884 ～1886		新潟 1886
	北広島市				広島 1884
	石狩市				山口 1885、愛知 1894、兵庫 1895、石川 1895
	恵庭市				山口 1885
	千歳市				高知 1870、山口 1884
	当別町	宮城1871			佐賀 1881、福岡 1883、岩手 1909

振興局	市町村	出身府県			
		士族	屯田兵	宗教団体	農民団体
渡島	北斗市				山形 1870
	木古内町				山形 1885
	八雲町	愛知 1877			福島 1870、福井 1915
	長万部町	愛知 1878			福島 1870、宮城 1916
檜山	厚沢部町				愛知 1884
	乙部町				山口 1880
	せたな町	青森 1870,71			福島 1870,1892
	今金町			京都 1891	愛媛 1897
後志	余市町	福島 1871			徳島 1879,1881
	仁木町				徳島 1879、山口 1881
	共和町	山口 1882			広島 1883、石川 1883,4
	倶知安町				島根 1895、山梨 1908
	京極町				富山、石川 1895、福島、群馬 191
	喜茂別町				岩手 1901、山梨 1911
	留寿都村				群馬 1911
	真狩村				香川、高知 1896、石川、徳島 189 兵庫 1904、群馬 1911
	黒松内町				福島 1870
空知	岩見沢市				石川、山口、鳥取 1884、和歌山 18 富山、福井、滋賀、岐阜 1893、広島
	美唄市		徳島、高知、愛媛、香川等 1891~94		山形、三重、愛知 1894
	芦別市				富山 1895、岐阜 1896
	赤平市				石川、三重 1895
	三笠市				石川 1894
	滝川市		山形、山口、福岡、佐賀等 1889,1890、石川、鳥取、島根、福岡 1894		
	砂川市				神奈川 1893
	歌志内市				富山、石川、三重 1895、岐阜 1896 井 1899
	深川市		香川、富山、愛媛、和歌山等 1895,96		愛媛 1897、長野 1911、山形、岐阜 19
	南幌町	宮城 1893			三重 1893,94、福井 1894
	由仁町				熊本 1892
	長沼町				福井 1894,96
	栗山町				山口 1888
	浦臼町			高知 1893	
	新十津川町				奈良 1889,1904、鳥取 1900
	秩父別町		香川、富山、愛媛、和歌山等 1895,96		
	雨竜町				青森、新潟、徳島 1893、群馬 1911
	北竜町				富山 1894、愛媛 1896
上川	旭川市		宮城、山形、徳島等 1891、愛媛、香川、青森、京都 1892		香川 1895、福島 1898
	士別市		宮城、福島、山形等 1899		山形 1902、奈良 1904、岐阜 1908、 島 1908
	名寄市				山形、富山 1900、岐阜 1901、福島、 田 1901
	富良野市				新潟 1888、石川 1897、三重 1901、 形 1913、福井 1923
	鷹栖町				岩手 1893、山梨 1894、愛媛、香川 189
	当麻町		徳島、広島、山口、愛知等 1893		
	愛別町				岐阜、愛知 1895、徳島 1919
	美瑛町				兵庫 1895、和歌山 1896
	上富良野町				三重 1897、徳島 1907、新潟 1908、 良、山形 1913

振興局	市町村	出身府県			
		士族	屯田兵	宗教団体	農民団体
上川	中富良野町				福井 1898
	南富良野町				三重 1901、富山 1909
	占冠村				静岡 1902、広島 1909、石川 1916、岩手、鹿児島、佐賀 1917
	剣淵町		宮城、福島、山形等 1899		
	美深町				愛媛、徳島 1903、福島 1907
留萌	小平町				石川 1896,98、富山 1897、宮城 1905、岐阜 1909
	苫前町				香川 1895、富山 1897、三重 1896,97
	羽幌町				福井 1896、富山 1896,98
	初山別村				福井 1896、新潟、富山 1898
	遠別町				福井、愛知 1897、千葉 1898、滋賀、山形 1909
	天塩町				福井 1899、富山 1901、岩手 1907、山形 1909
宗谷	幌延町				福井 1899、新潟 1900,1919、福島 1919
	稚内市				福島、埼玉、岐阜 1917
	浜頓別町				宮城、秋田 1917
	中頓別町				熊本 1912、福島 1913,1918
	枝幸町				秋田 1912、山形 1918
オホーツク	北見市		山形、石川、岐阜等 1897,98 石川、福井、岐阜等 1897,98	高知 1897	岩手、石川、愛媛 1915 高知 1895、岐阜 1898、福島 1912 愛媛 1915
	網走市				青森、広島 1914
	紋別市				徳島 1896、高知 1897,1911、福島 1896,1906、富山、山形 1909、秋田 1911、佐賀 1917
	大空町				青森、広島 1914、佐賀 1917
	美幌町				高知 1893、鳥取 1898、長野 1900、秋田 1911,12、兵庫 1911
	津別町				秋田 1911,12,15、兵庫 1911
	斜里町				秋田、山形 1911、栃木 1914、神奈川 1915
	小清水町				岡山 1915、青森 1916、福島 1916,17、静岡 1917
	置戸町				高知 1897、福島 1911、秋田 1911,12、青森 1912
	佐呂間町				宮城、岡山 1906、栃木 1911、青森 1913、奈良 1915
	遠軽町				宮城 1913、三重 1916、福島、佐賀 1917 奈良 1912、宮城 1913、山形 1916
	湧別町				高知、徳島 1894、新潟 1897、山形 1897,1914、福島 1912、静岡 1913、奈良 1912、山形 1915、滋賀、佐賀 1916、福島 1917
	滝上町			岡山 1909	富山、高知 1908、岡山 1909
	興部町				富山、高知 1898、岐阜 1914
	西興部町				高知 1899
	雄武町				宮城、岩手 1911
胆振	室蘭市	宮城 1870	鳥取、愛媛、兵庫等 1887,89		
	苫小牧市				愛知 1870、鳥取 1895
	登別市	宮城 1870,71			愛媛 1882
	伊達市	宮城 1870,71			
	豊浦町				山梨 1908
	洞爺湖町				香川 1887,91
	厚真町				石川 1896

振興局	市町村	出身府県			
		士族	屯田兵	宗教団体	農民団体
胆振	むかわ町				山口 1882、広島 1893、佐賀 1914、宮木 1918
日高	日高町	宮城 1870			福島 1918、石川 1897
	平取町	宮城 1870			
	新ひだか町	兵庫 1871		兵庫 1885	兵庫 1871,86、福井 1891
	浦河町			兵庫 1881	長崎、熊本 1871
	様似町				富山 1894,95
十勝	帯広市				静岡 1883、石川、兵庫 1896、岐阜 1896,98 福井 1897、三重 1898、富山、徳島 1919
十勝	音更町				兵庫 1896、富山 1897,98、岐阜 1897,98、1915、石川 1898、滋賀 1916、鳥取 1917、佐賀 1918
	士幌町				福井、岐阜 1897、徳島 1912
	鹿追町			滋賀 1916	
	新得町				山形 1899、福井、高知 1900、福島 1906、青森 1909
	清水町				香川 1898、山形 1899、福井 1900
	芽室町				石川 1896、愛知 1896,97、香川、福井 1898、島根 1917
	中札内村				石川、福井 1897
	大樹町				大阪 1895、滋賀 1896、富山、愛知 1898、岩手 1914
	広尾町				石川、徳島 1897、富山 1905、福井 1911
	幕別町				徳島、香川 1892、岡山 1896、三重 1897、富山 1898、島根 1917、滋賀 1895
	池田町				福井、石川、富山 1896、徳島 1897
	豊頃町				富山 1893,98、鳥取 1896、千葉、福島 1897
	本別町				徳島 1897、福井、岐阜 1898、福島 1900、神奈川 1905、富山 1907
	足寄町				佐賀 1917
	浦幌町				岐阜 1896、石川 1897,1901,06、長野 1906
釧路	釧路市	佐賀 1871 鳥取 1884			青森、秋田 1870 富山 1897、宮城 1918、福島 1917
	釧路町				青森、秋田 1870、群馬 1902、福島 1914
	厚岸町	佐賀 1871	石川、山形、福井、新潟等 1890		静岡 1916
	標茶町				山梨 1897、宮城、徳島 1915
	弟子屈町				富山 1899,1902,08、愛媛、徳島、高知 1911、香川 1911,12、茨城 1912,13、福島 1913
	鶴居村				岩手 1902,17、福島、福井 1902、宮城 1915、香川 1916、山形、岐阜、和歌山 1918
	白糠町				富山 1897、福島 1907、岩手 1917
根室	根室市		福井、石川等 1886 鳥取、福岡、佐賀 1888,89		広島 1882
	中標津町				徳島 1911、福島 1919
	標津町				秋田 1919

※数字は移住年。数字がないのは移住年未確認。

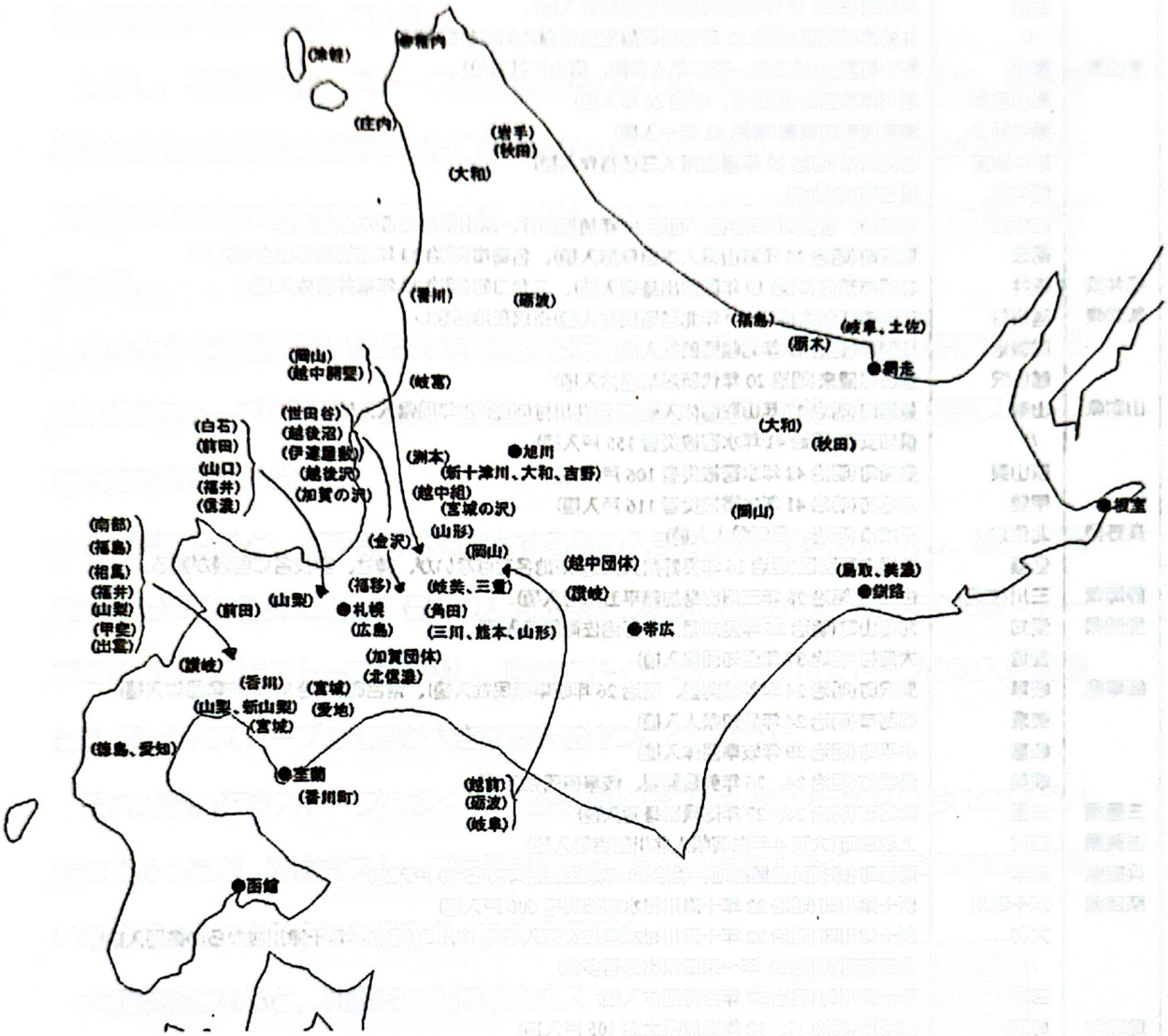
編集　野外博物館北海道開拓の村事業本部

館長　中島宏一

2021年8月1日

北海道に残る郷土の地名

開拓期に移住してきた人々の足跡を、今の地名に見つけることができます。



出身県	道内地名	所在市町村及び入植時期
青森県	南部	真狩村(明治 37 年南部団体入植)
	津軽	礼文町香深村(鰊漁民移住)
秋田県	秋田	鷹戸町(明治 44 年雄勝、平鹿団体入植)、中頓別町(明治 45 年入植)
岩手県	岩手	中頓別町(明治 45 年入植)
山形県	山形	美唄市西美唄町(明治 27 年入植)、由仁町(明治 30 年東村山郡入植)
	庄内	豊富町上サロベツ(旧地名)
宮城県	宮城	伊達市(明治３年伊達邦成主従入植)、大滝村(明治 40 年宝江村団体入植)
	宮城の沢	砂川市(明治 41,44 入植)
	白石	札幌市白石区(明治３年仙台藩白石城主片倉邦憲主従入植)
	角田	栗山町(明治 21 年角田領主石川光親主従入植)
	伊達屋敷	江別市(明治 15 年旧宇和島藩主伊達宗城主従入植)※地名ではない

出身県	道内地名	所在市町村及び入植時期
福島県	福島	幕茂別町(明治44年福島団体入植)、鴻別町(大正5年福島団体入植)
	相馬	ニセコ町福井(明治29年～相馬団体入植)、紀の丘(明治42年入植、紀の丘神楽伝承)
栃木県	栃木	佐呂間町(明治44年足尾銅山鉱毒罹災者入植)
東京都	世田谷	江別市(昭和20年戦災疎開者「拓北農兵隊」入植)
石川県	金沢	当別町(明治19年金沢出身松村市三郎入植)
	越前	栗沢町(明治29年入植)
	加賀団体	長沼町(明治31年石川県人押切彦次郎入植)
	加賀の沢	厚田村望来(明治27、28年石川県団体入植)
	前田	共和町(明治16年旧金沢藩設立起業社入植)、
	〃	札幌市手稲区(明治27年旧加賀藩主前田利為前田農場創建)
富山県	富山	栗山町富士(旧地名、富山県人多数、富山神社有り)
	富山団体	旭川市神居町(旧地名、明治26年入植)
	越中団体	南富良野町幾寅(明治41年～入植)
	越中開墾	岩見沢市(明治22年富山県人三枝甚作入植)
	越中組	浦臼町(旧地名)
	越中渡	帯広市、音更町(旧地名、明治30年加賀団体、富山県移住者の出身県名)
	砺波	栗沢町(明治26年富山県人本田幸彦入植)、名寄市(明治33年西砺波郡出身者入植)
福井県	福井	札幌市西区(明治19年同県出身者入植)、ニセコ町(明治33年福井団体入植)
新潟県	越後村	江別市江別太(明治19年北越殖民社入植)※現在地名なし
	越後沼	江別市(明治19年北越殖民社入植)
	越後沢	厚田村望来(明治20年代新潟県団体入植)
山梨県	山梨	豊浦町(明治37年山梨団体入植)、赤井川村(明治41年同県人入植)、
	〃	倶知安町(明治41年水害被災者155戸入植)
	新山梨	豊浦町(明治42年水害被災者106戸入植)
	甲斐	京極町(明治41年水害被災者116戸入植)
長野県	北信濃	千歳市(戦後、長野県人入植)
	信濃	札幌市厚別区(明治16年長野県人入植)※地名ではないが、神社、学校名に信濃が残る。
静岡県	三川(三河)	由仁町(明治28年三河出身加藤平五郎等入植)
愛知県	愛知	北檜山町(明治26年愛知県人水野治佐衛門等入植)
	愛地	大滝村(明治37年愛知団体入植)
岐阜県	岐阜	栗沢町(明治24年美濃開墾、明治26年岐阜植民社入植)、常呂町(明治31年岐阜団体入植)
	美濃	釧路市(明治24年愛知県人入植)
	岐富	小平町(明治39年岐阜団体入植)
	岐美	南幌町(明治24、26年美濃開墾、岐阜植民社入植)
三重県	三重	南幌町(明治26、27年同県出身者入植)
滋賀県	滋賀	上湧別町(大正4年滋賀県人北川善吉等入植)
兵庫県	洲本	雨竜町(蜂須賀農場跡地、明治30年淡路島洲本から20戸入植)
奈良県	新十津川	新十津川町(明治22年十津川村水害被災者600戸入植)
	大和	新十津川町(明治22年十津川村水害被災者入植)、中川町(昭和4年十津川村からの集団入植)、
	〃	留辺蘂町(明治31年～奈良県出身者多数)
	吉野	新十津川町(明治37年吉野団体入植)
鳥取県	鳥取	釧路市(明治17、18年鳥取県士族105戸入植)
岡山県	岡山	岩見沢市(明治20年頃同県人入植)、三笠市(明治16年同県人番守人見寿吉等開墾)、
	〃	陸別町(明治44年近藤雅夫等同県人入植)
山口県	山口	札幌市手稲区(明治15年～同県人入植)
島根県	出雲	倶知安町(明治28年山陰移住会社入植)
広島県	広島	北広島市(明治17年～同県人和田郁次郎等入植)
徳島県	徳島	北檜山町(明治24年同県人入植)
香川県	香川	洞爺村(明治22年香川団体入植)、苫前町(明治26年頃香川県人入植)
	香川町	室蘭市(入植者に香川県人多数)
	讃岐	鵡越町(明治33年香川県人小野高介等入植)、清水町(明治36年徳島県人入植)
高知県	土佐	常呂町(明治28年土佐団体入植)
福岡県	福移	札幌市北区、江別市(明治14年福岡県出身者設立報国社入植)
熊本県	熊本	由仁町(明治24年熊本団体入植)

暖　房

明治二年に設置された開拓使は、寒気の厳しい北海道の冬の生活には欧米に範をとった家屋の改良、暖房の設備が不可欠と考え、洋風家屋を奨励し、九年にはストーブ奨励の布達を全道に通達している。

しかし、家屋の改良、ストーブの設置にはかなりの経費を必要とし、また、移住者がそれまでの生活様式を簡単に捨てきれなかったこともあり、一般庶民の冬の生活といえば粗末な和風の家屋で炉に薪をくべ、火鉢、コタツなどで寒さを凌ぐといった程度であった。

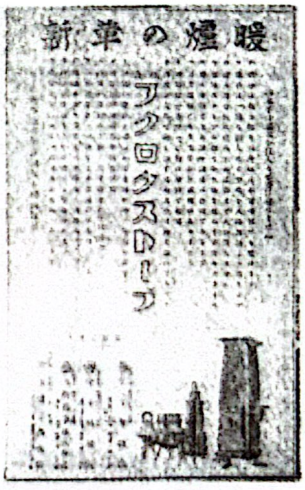
このような状態が続いた住民の採暖法も明治の後半になると、次第に薪を燃料とする鉄板製ストーブが普及するが、さらに、大正末期から昭和初期にかけて暖房ストーブに大きな変化が見られる。

この頃になると、都市部では燃料とする薪の入手が困難となるのに対し、炭山の開発や輸送機関の整備によって石炭の入手が容易になったことから、それまでの薪ストーブに代わって石炭ストーブが普及し、同時にドイツ製のユンケルストーブの輸入を契機とする貯炭式ストーブの出現が大きな意味を持つことになった。

それ以前の石炭ストーブの多くは、粗雑な投込式でばい煙や石炭灰の汚れのひどいものであったが、貯炭式ストーブは長時間石炭補給の必要性がなく、また燃焼効率が良いためばい煙による汚れも少なかったからである。

大正末期になると、札幌を中心に貯炭式ストーブの研究が続けられ、後に市民に親しまれた「フクロク」、「カマダ」などのストーブもこの時代に生まれたものであった。

このストーブの定着こそ、真の意味での冬の生活文化の確立であったといえよう。



出典：「さっぽろ文庫第7巻 札幌物語　札幌市教育委員会　北海道新聞社

灯　火

明治期に石油ランプが普及するまではもっぱら魚油やローソクを用いた行燈、燭台、提燈などが生活の必需品であった。

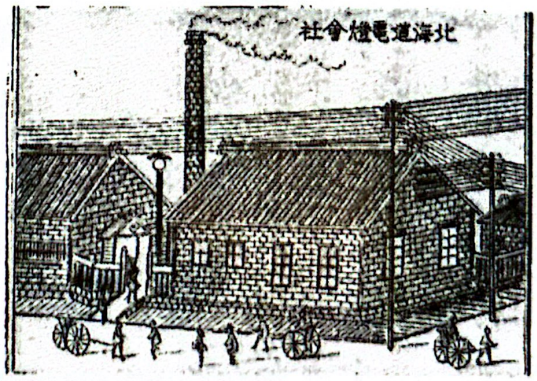
油は、主にニシン油が用いられたが、開拓使は野生の菜種が多いのに着目し、明治八年製油所を設けて搾油事業に取組み、後に払下げ民営とし、十三年、南一条西三丁目に初めて売捌店を開いたので油は買いやすくなった。

石油ランプは、江戸時代末期に欧米から伝わるが、明治五年頃から国産品が出回るようになって札幌でも多く使われはじめた。当初の石油は品質が悪く、ランプの取り扱い方に不慣れのため火災を起こすことがたびたびあったが、十年代には一層普及し、行燈に代わる明かりとして重宝がられた。

発電事業は、明治二十二年二月に札幌電燈舎を設立、同年八月認可を受けて火力発電所を大通西三丁目に建築、二十四年十月めでたく点灯した。一般営業の電気は北海道最初だったが、需要戸数はわずか三十戸、道庁、郵便局のほか山形屋旅館、東京庵など官庁と大商店が主であった。その後明治二十九年、この年は函館でも千四百灯が点灯、一方の札幌は八百十三灯に過ぎず、街灯にいたっては市内に五つしかなかった。

夜間の照明用とは別に、動力用に大規模な水力発電を計画したのは札幌区である。明治三十一年に札幌水力電気創立意見書をまとめたが、区営に疑義が出たり、日露戦争による経済事情から実現には至らなかった。

これとは別に、定山渓に発電所を建設すべく三十八年五月、北海道電気株式会社を設立し、この会社が火力発電を続けていた札幌電燈を合併して、四十年三月に水力の定山渓発電所を完成、五月一日から供給を始めている。



北海道電燈会社の図
〈「札幌区実地明細絵図」(明26)から〉

出典：「さっぽろ文庫第7巻 札幌開治　札幌市教育委員会　北海道新聞社

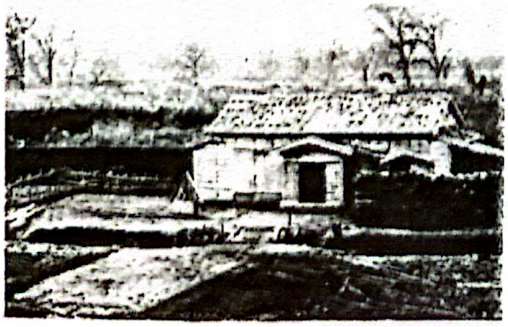
官　舎

札幌のまちづくりは、官舎の建設から始まった。官舎は札幌の本格的な建築物の第一号でもあった。

明治二年十月末、現地に入った島開拓判官らの札幌本府建設部隊は、直ちに建設を指揮する係役人の官舎と、建設労働者飯場、食糧庫の仮小屋の建設を開始した。無人の原野の真ん中での設営で、厳冬期を目前にしての住居の確保が何よりも優先したのである。

創成川を挟んで、官舎「第一号」が建てられた。現在の北一条と北二条の東一丁目の一戸建て三戸（上級役人向け）、同じく北一条と北二条の西一丁目の真ん中に当たる大通西一丁目の長屋建て三棟（下級役人向け）がそれである。明治二年十一月から翌三年一月頃にかけた工事で、建築用材はすべて津軽で切り込み、現地に搬入し組み立てたものである。

上級役人向け、現代風にいえば課長補佐か係長クラスの官舎を見ると、建物の面積は約百二十平方メートルであるが、敷地が約二千九百七十五平方メートル（九百坪）もあり、現今のきびしい住宅事情から見ると夢のような話で、土地だけはふんだんに使えたのである。また、面白いことに官舎には、馬屋が別棟で付設されていることで、乗馬が官給されていたらしい。騎乗で役所へ通勤したかは疑問だが、市中の調査とか市外の出張には乗馬は欠くことのできない存在であったのである。



明治３年完成の官舎第１号

なお、戦後、官舎という呼び名はなくなり、公宅、公舎、宿舎などに変わり、官舎給付の考え方も、福利厚生施設の一つ、という色彩が加わっている。

出典：「さっぽろ文庫第7巻 札幌歴史」　札幌市教育委員会　北海道新聞社

ビヤホール

ビヤホール工場が札幌に完成したのは、明治九年九月六日のことであり、いまの北2条東4丁目のあたりである。記録には「開拓使札幌麦酒醸造所」という、いかめしい看板は掲げられたが、この西洋麦酒が直ちに売れたわけではない。

はじめは「健康飲料」として宣伝はしてみたものの、これに手を出すものはあまりいなかった。ときには薬局などでも売られ、奇妙な「魔法水」などともいわれた。

これが西洋酒類として知られるようになったのは、はるか下って日露戦争以降のことである。最初、札幌麦酒会社では、市内に今井洋物店など三箇所の特約店を置いて「ミュンヘン式生ビール」という触れ込みで盛んに宣伝を行ったようである。

特約店に続いて、明治四十三年、新しいビヤホールが狸小路の3丁目に開店になったが、既に、東京の銀座などにビヤホールが出現し、なかなか好評を博していたことから、札幌も右ならえしたものであろう。続いて明治四十四、五年頃には、狸小路の2丁目に札幌ビール会社直営のビヤホールが出来た。

当時は、やはりモダンな農学校の生徒たちも随分とホール通いを始めたといわれる。なかには、コップ70杯も飲んだ生徒がいたり、ビヤホールに来て「ビヤホールを一杯くれ」なんていう豪傑のお客さんもいたといわれる。

そのころは、四合瓶(びん)一本が二十四銭位で、ビヤホールでのコップ売りは一杯が三銭であった。

また、明治時代の直営は、ビール会社がビールを委託販売している頃の直営で、ビール会社が正式に「狸小路ビヤホール」として直営を始めたのは、大正3年五月一日であるという。

出典：「さっぽろ文庫第7巻　札幌物語　札幌市教育委員会編　北海道新聞社

除　雪

札幌の除雪の歴史は、開拓使札幌本府が建設され、冬季も活動しなければならなくなってからこの方、人々は雪と取り組んできたのである。

当初は人力に頼ることしかなく、囚人による雪踏みなども実施されたが、明治十一年の黒田長官のロシア視察を契機として、十二年には、春、冬は馬橇を用いて札幌～手宮間の運輸が開始されているので、馬橇に三角形のプラウを付けた、通称三角と呼ばれて長い間親しまれた除雪道具も、この頃に原型ができあがったのであろう。

「札幌県治類典」によれば、明治十九年一月駅逓係は関係部署に対して札幌市街での馬橇の左側通行励行方を通知し、互いに通路を争ったり、二筋の道のある場合には勝手によい方の道を通行しないよう注意を与えている。また、これに付された雪中道付個所図によると、当時、札幌中心部の道路には、幹線道路に二筋、その他に一筋の雪道を付けていたことがわかる。

その後も火災上の必要などから、踏雪、除雪を推進するための諸方策が講じられたが、人力、馬力にたよる、そのものは長い間変化がなく、機械の使用は昭和に入ってからであった。

なお、機械による本格的な除雪は、戦後になってから占領軍の機械力確保のための至上命令により実施された。

ところで、道路除雪に並々ならぬ関心を寄せていたものに、お客を自店に引き寄ねばならぬ商店街がある。狭い仲小路の両側に商店が密集する狸小路などでは、雪の捨て場がないために、真ん中にうず高く積み上げられた雪の上を人々が歩くといった状態であったので、共同で排雪人夫を雇ったこともあった。

道路中央に雪をうず高く積み上げた大正末期の狸小路

出典：「さっぽろ文庫第7巻 札幌事始」　札幌市教育委員会　北海道新聞社

電　話

本道最初の電話は鉄道用であった。明治十三年開通の手宮～札幌間鉄道には電信を用いたが、札幌～幌内間は電話を用いることになり、札幌、江別、岩見沢、幌内太、幌内の各停車場に電話機を置き十六年九月に開通した。

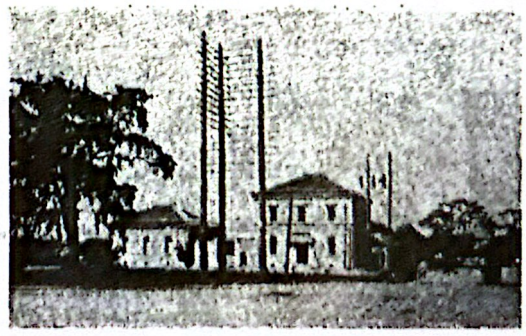
札幌の官庁用電話の第一号は、ちょうど一年後の十七年九月札幌県庁～同県監獄署に開設されたものである。

本道の電話交換第一号は、札幌で明治三十三年三月一日に開始した。これは日本最初の東京・横浜に遅れること十年、全国の十一番目である。交換開始時の電話加入数は百四十一で、電話番号を屋号としたのは五番舘である。

電話交換手は新聞などで募集し、十一人（男三人、女八人）を採用し第一号のグループとなった。男子交換手は午後六時から翌朝六時までの夜間勤務だが、加入者の評判が悪く、三十八年三月で廃止し、以来、電話交換手は女子のみの職場となった。

公衆電話は、交換開始時に局内に設けた大通電話所が第一号で、自動電話（局外公衆電話）は、明治三十四年九月に札幌と小樽の停車場上等待合室へ設置したのが最初である。札幌からの市外電話は、その前年の三十三年五月十六日に開始した小樽との間が最初であり、次いで三十五年七月に旭川、大正六年五月に函館、十五年九月に東京と次第に延長されていった。

最初の電話交換局舎は、豊平館の敷地と並び、三十一年十二月に落成した。この建物は四十二年に同じ仕様で継ぎ足し増築を行い、同時に新築した札幌郵便局に包含されたが、昭和三十七年に取り壊される際、明治時代の石造り建造物の代表作として愛知県の明治村に移設、復元されている。



交換開始当時の札幌電話交換局
（「札幌区史」（明44）から）

出典：「さっぽろ文庫第7巻 札幌開始」札幌市教育委員会 北海道新聞社

馬車・馬橇

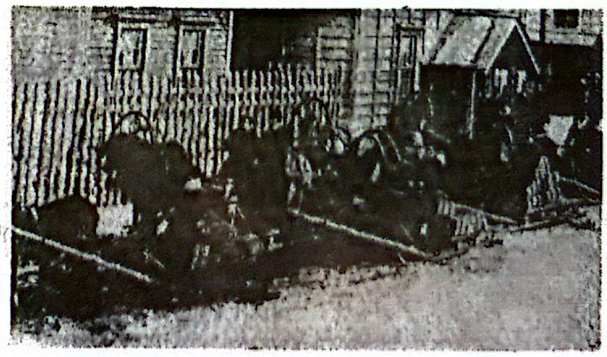
開拓長官黒田清隆は、明治十一年にロシア領のウラジオストックなどを視察した際に、馬車や馬橇が大変便利であることを知り、乗用馬車二両、乗用馬橇一台、馬四頭を購入するとともに、車橇製作の職工三人を雇って帰り、札幌で製作させたのが、北海道での馬車、馬橇づくりの最初であるといわれている。

開拓使工業局では、ロシアから招いた職人に日本人の職人を付けて、同年から本格的な馬車、馬橇製作に着手した。十一年から十五年二月までの統計では、乗馬車七両、荷馬車二百八十二両、乗橇十九台、荷橇四百二十台をつくり、この内二百三十二両、二百九十八台を民間に払下げている。

一方、工業局製の馬車、馬橇を使って、明治十二年四月から札幌～手宮間の本格的な運輸事業を開始した。十二～十三年の冬には馬橇が六十八台配置され、このほかに屯田兵分が七十余台、民間の分が五十余台活躍した。当時の札幌～手宮間の運賃は、大人一人四十三銭であった。

この運輸事業は、幌内鉄道の開通に伴って廃止され、十四年十月からは札幌～室蘭間の運輸が始まり、各地の継替所には札幌製の車、橇が配置された。

開拓使廃止後も北海道事業管理局札幌工業事務所の木工場で大量の馬車、馬橇が製作され、明治二十年代に入ると、そこで技術を習得した職工が独立して製作を始めた。車、橇の型も初期のロシア型が改良され、北海道的な二輪の金輪馬車、柴巻馬橇ができ上がり、開拓地域の拡大につれて全道に普及していった。北海道の殆どの地域で、単に馬橇といえば柴巻馬橇を指し、それを札幌橇とも呼んだのは、このような歴史的事実によるのである。



札樽間の輸送に活躍した馬橇（明12）〈北大北方資料室所蔵〉

出典：「さっぽろ文庫第7巻 札幌事始　札幌市教育委員会　北海道新聞社

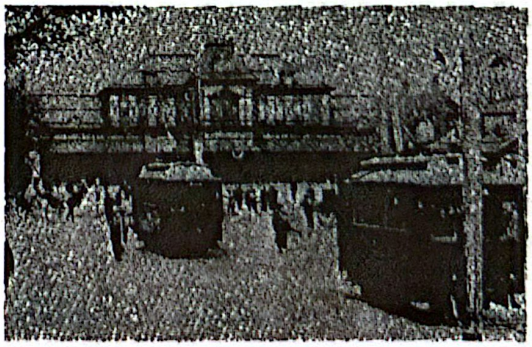
馬鉄 - 電車

明治年間の交通機関は、専ら馬車、馬そりであったが、明治末年から軌道を敷設して馬車を走らせる馬車鉄道（馬鉄）が延び、札幌の電車は、大正七年にこの馬鉄を電化するという形で発展した。

馬鉄は、明治三十七年に札幌石材馬車鉄道合資会社（後株式に改組）を設立し、四十二年に平岸村字穴ノ沢（石切山）から山鼻村界まで運行したのが最初で、翌四十三年には、さらに石山通りを北上して北五条西十一丁目へ出、右折して札幌停車場まで結んだ。軌間二フィート6インチ、一頭曳き客車で十二人乗り、料金は三銭だったという。

同社は社名からも分かるように、もともとは石切山の石材を搬出するのが目的であったが、続いて社名を札幌市街軌道株式会社と改め、大正元年八月から、札幌停車場～中島遊園地、南一条西十五丁目～東二丁目、札幌停車場～苗穂停車場などの営業を開始し、以降路線を整備して、馬車も二十人乗りを導入するなど、主力交通機関となった。

大正六年、開道五〇年記念博覧会の開催を前に、同社は馬鉄を電車に切り替える方針を決め、翌七年四月、雪解けを待って馬鉄軌道撤去が始められたが、三井物産を介してシアトルから購入手配中だったレールの到着が遅れ、また、当初イギリスのデッカー社から購入予定の車両も、八月からの博覧会に間に合いそうにないというので、急遽名古屋電気鉄道（株）から譲り受けて手当てした。このため突貫工事となったが、八月十二日午後九時、最後の犬釘が打ち込まれるとともに営業運転開始ということになった。



大正９年ごろの電車（「さっぽろの足」（昭52）から）

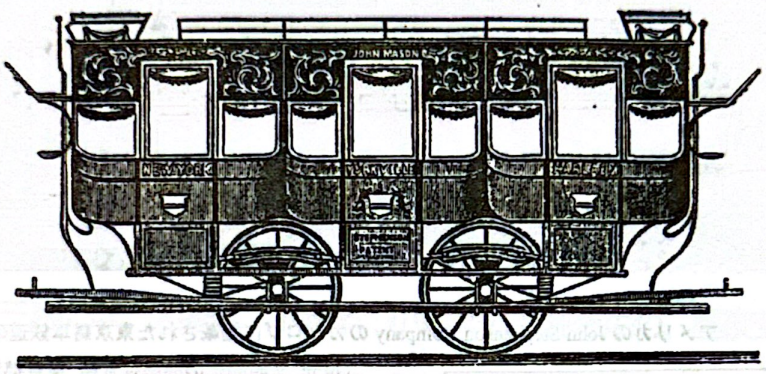
最初に開通した路線は、札幌停車場～中島公園など三線で、乗車料金は片道六銭、往復十銭であった。翌年から年々路線を延長し、後、昭和二年十二月市がこの事業を買収して、現在の市営交通の基礎となった。

出典：「さっぽろ文庫第7巻 札幌事始」札幌市教育委員会 北海道新聞社

アメリカ発イギリス経由日本行き

馬車鉄道はアメリカから

わが国最初の馬車鉄道「東京馬車鉄道」は、1872（明治５）年新橋と横浜間に開業したわが国最初の鉄道と同様イギリスの技術を導入して建設されたが、「東京馬車鉄道」に見られる都市型馬車鉄道はアメリカの強い影響を受けている。つまり、ロンドンで最初の都市型馬車鉄道は、1861（文久１）年に開業したマーブル・アーチ・ストリート鉄道で、経営者はジョージ・フランシス・トレインというアメリカ人の軌道事業者であった。そのアメリカでは、1832（天保３）年にはニューヨークで都市型馬車鉄道が既に開業していたのである。



世界最初の市街鉄道馬車（ニューヨーク 1832 年）　（東京馬車鉄道 都史紀要 33 東京都公文書館より）

原資料：AUGUSTINE W. WRIGHT, AMERICAN STREET RAIL WAYS, CHICAGO, 1888, P115

1871（明治４）年に岩倉使節団がワシントンで乗車した馬車鉄道の記録によると、アメリカのシカゴで開業した馬車鉄道が、その後アメリカ国内、イギリス、ドイツなどの地域に波及したとある。

〈米国ノ通街ニハ、鉄軌ヲ敷テ街車ヲヤル、華盛頓府（ワシントン）ノ「アヴニュー」ハ、ミナ此設ケアリ、街車ハ「ストレートカール」、又「オミニュビス」ト云、往来路ヲ定メ、処処ニ止リ、行客ヲ上下セシムル、乗合馬車ニテ、其車大小アリ、大ハ蒸気ノ乗車ノ如ク、五十人モ乗セ、二馬ニテ牽ク、小ナルハ一馬ヲ繋ク、二十七八人ヲ乗セルヘシ、又荷物ヲ運フ街車アリ、大抵一馬ヲ駕ス、此車ハ鉄軌ノ上ヲ行カス〉

〈街車ハ、桑港市高俄（シカゴ）ヨリ以来、都府ニハ必ス此設ケアリテ、欧米一般ニ行ハル、但車ノ製ハ国国ニ小異アリ、市街ニ鉄軌ヲ敷テ、此街ヲ往来セシムルハ、米国ノミ一般ニ流行ス、欧州ニテハ、英ノ「リヴァプール」及ヒ倫敦府ニノ街ト、オーストリアノ維也納（ウィーン）、独逸ノ「フランキホルド」ニ於イテ、此街車鉄軌ヲ設ケタルヲミタルノミ、街車ノ鉄軌ハ、汽車ノ鉄軌ト較異ナリ、木ノ角材ヲ、地中ニ横列シ、夫ニ熟鉄ノ軌ヲ釘連シ、土ヲ覆テ木材ヲ埋ム、鉄軌ノ幅ハ三「インチー」中ヲ凹ニスル三分ニ「インチー」、上広ク底狭シ、僅ニ輪ヲ含ムノミ、其面ハ地平ヲ出サシメス、故ニ他車ノ往来ニ妨ケナシ、汽車鉄軌ノ如クニ、路上ニ凸出セス〉

※「街車鉄軌」とは馬車鉄道を指す

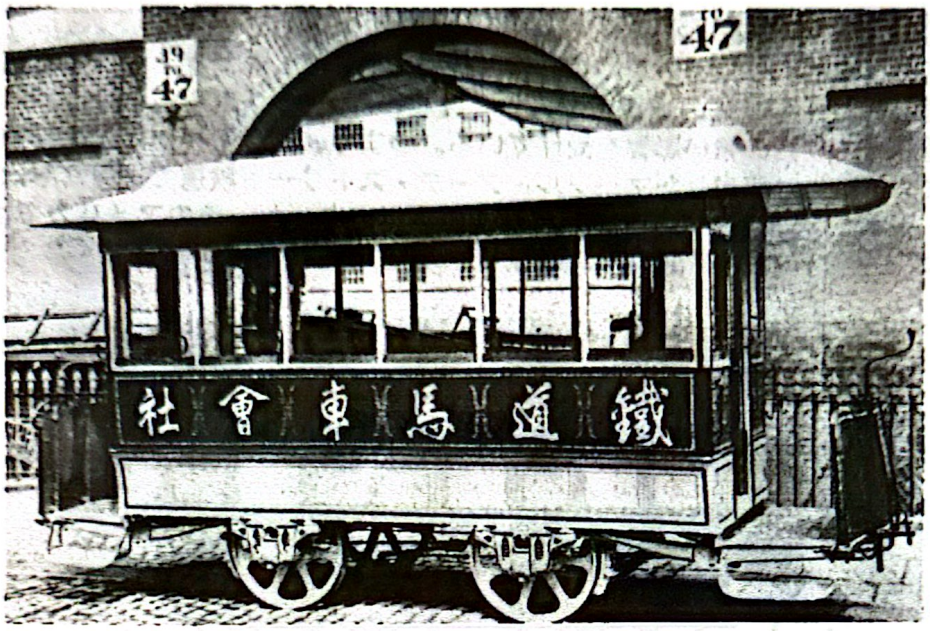
（特命全権大使 米欧回覧実記 第十巻 「コロンビア」県の総説 久米邦武編、田中彰校注 岩波文庫より）

上記引用文の「街車鉄軌」とは市街馬車鉄道のことで、ストリート・レールウエイの直訳である。アメリカでは公道上にレールを敷設して旅客を輸送するものを普通鉄道と区別してストリート・レールウエイ、車両をストリート・カーと呼んだ。イギリスではトラムウエイ、トラ

ムカーとも呼んだ。

アメリカ製の車両

開業当初はイギリスから輸入した技術も、その源流であったアメリカを経て、技術の進歩に伴って国産化へと移行した。



アメリカの John Stephenson Company のカタログに掲載された東京馬車鉄道の車両　1882（明治 21）年
（復元 文明開化の銀座煉瓦街 東京都江戸東京博物館監修より）

車撥運車客車馬道鐵

内國ノ率先者トシテ製
造シタル所ノ鉄道馬車
ハ爾来倍々改良ヲ加ヘ
極メテ軽便ニシテ極メ
テ堅牢ナル車輌ヲ廉價
ニテ製造仕候

日本で初めて馬車・馬車鉄道を製造した「日本馬車会社」（明治 22 年 10 月創立）のカタログに掲載された馬車鉄道車両 1894（明治 27）年
（東西交流叢書 3 「明治の郵便・鉄道馬車」 篠原宏著より）

北海道開拓の村 企画展「北海道における軌道－馬車鉄道から路面電車へ」 2002 年 2 月開催
〒 004-0006 札幌市厚別区厚別町小野幌 50-1　TEL（011）898-2692　（中島 宏一）

警　察

札幌市における近代警察の起源とされるのは、明治五年八月に仮設された、札幌邏卒(らそつ)屯所の設置であった。

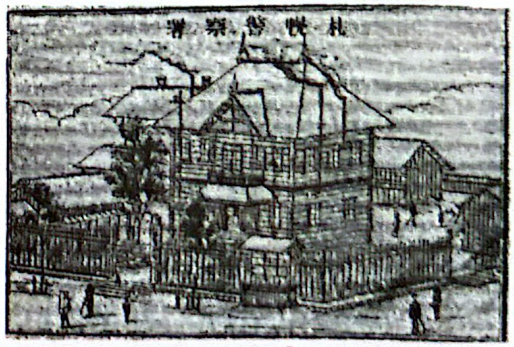
当時札幌は、「札幌中央署沿革史」によると「札幌区創始の民は土方、浮浪者又は一攫(いっかく)千金の徒多く、」とあって、明治初年頃の札幌には大勢の人夫などが来往し、それに伴って、種々いざこざから、果ては犯罪にまで及んでいた。

開拓使でも、日ごとに増大する犯罪から住民を保護するため邏卒設置の必要性を痛感していたが、とりあえず同年六月に設置された函館邏卒の応援を要請し、二十人の邏卒の到着をまって、創成通りの官舎に仮屯所を設けて、八月から市中巡邏を開始したのである。

その後開拓使では、太政官の認可を得て同年十二月制定の邏卒規則により邏卒課を置き、そして六年三月には、大邏卒、中邏卒、小邏卒の職制を定め、昼夜交代で屯所に勤務した。

八年十二月、「開拓使行政警察規則」を設け初めて警部、巡査の職制が定められ、邏卒を巡査と改称し、ここに札幌巡査屯所として新しく発足した。そして、これが現在の札幌警察署に改められたのは、明治十一年三月からのことである。

また、人々から親しまれてきた「交番」の文字が本道に最初に現れたのは、五年八月制定の「函館邏卒自守条目」であるが、札幌市街に初めて置かれるようになったのは、十三年九月に三ヶ所設置され、交番所という名称で呼ばれていた。これが札幌県時代になり、明治十七年十一月に巡査派出所と改められ、正式の名称としての交番所は、一時姿を消すことになったのである。



札幌警察署の図(「札幌繁栄図録」(明20)から)

出典：「さっぽろ文庫第7巻 札幌歴史」　札幌市教育委員会　北海道新聞社

行　幸　啓

明治天皇の最初のご来道は明治九年七月である。東北ご巡業の帰途、開拓使の要請で函館にご上陸し、二泊された。

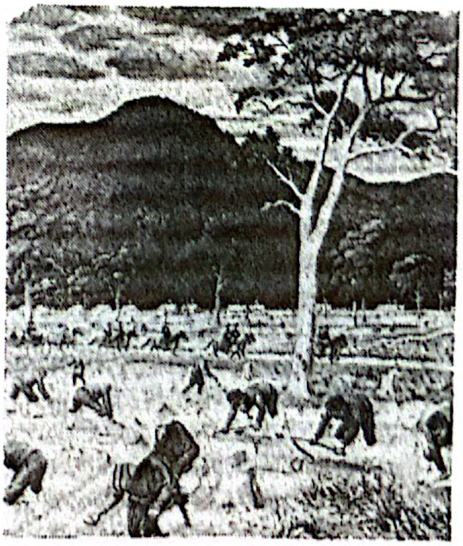
札幌行幸は明治十四年、長官黒田清隆が内請したものであり、行幸に先立って献上品の禁止や心得などが達せられた。

天皇は七月三十日東京を出発、山形、秋田を経て八月二十九日青森からお召艦扶桑にご乗船、荒天のため少し遅れて翌三十日午後五時小樽入港、ご小憩ののち前年開通した鉄道（機関車義経号、お召列車開拓使号）で夜九時に札幌駅に到着、沿道奉迎の中を行在所の豊平館にお入りになった。豊平館は洋造ホテルとして前年十一月に落成したばかりで、玉座、ご寝室、謁見所、侍従室などは二階に設けられた。

翌三十一日は午前九時二十五分開拓使本庁に出御、ついで木挽場、製粉所、麦酒製造所等、札幌村、苗穂村、ブドウ園、午後は農学校園をご覧になった。九月一日は真駒内牧場においでになり、牧畜耕作をご覧になった。帰りは石山新道で豊平川仮橋を経て山鼻村へ進まれた。このとき、山鼻学校楼上からお目にとめられて樹名を問われた樹がカシワで、長く山鼻小公園に「お声掛りの槲」として残っていた。こののち札幌農学校、偕楽園精華亭に行幸、旧樺太アイヌの舞曲をご覧になった。

九月二日午前七時天皇は行在所ご出発、千歳ご一泊、白老、室蘭、森を経て七日函館を迅鯨艦にてご出帆、十月十日東京御着。道内は九日間のご巡幸の旅であった。

皇太子の行啓は明治四十四年七月、のちの大正天皇のご来札があり、今に残る南十四条行啓通りの名は、そのときの皇太子殿下お通りを記念したものである。



明治天皇山鼻屯田御通覧図

出典：「さっぽろ文庫第7巻 札幌歴史」札幌市教育委員会 北海道新聞社